第一章

私たちは、長い間、どもりを隠し続けてきた。「どもりは悪いもの、劣ったもの」という社会通念の中で、どもりを嘆き、恐れ、人にどもりであることを知られたくない一心で、口を開くことを避けてきた。

「どもりは努力すれば治るもの、治すべきもの」と考えられ、「どもらずに話したい」という、吃音者の切実な願いの中で、ある人は職を捨て、生活を犠牲にしてまでさまざまな治すこころみに人生をかけた。

1　どもりは悪いもの、劣ったもの

伊藤伸二

あなたはどもりのためにどのような態度をとられたか

言友会の理論研究部が昭和四五年に行った調査の報告がある。小・中・高校時代に教師や家族、友人がどのような態度を吃音児にとったかの質問に対して次のような回答が寄せられている。

教師からは、

○小学校時代

・矯正所へ行くように言われた。
・ゆっくり読むよう指導された。
・なるべく本を読まさないようにされた。
・わざと本を読ませられ、からかわれた。

○中学校時代
・「なんだ、どうしたんだ、お前どもりか」と言われた。
・冷たい態度の先生と思いやりのある先生の両方がいた。
・放任で朗読はさせられなかった。
・矯正所のパンフレットを見せられた。
○高校時代
・放任で、朗読、発表をさせられなくなった。
・治療するよう注意された。
・先生に無関心な態度をとられた。
・「お前どもりか」と言われた。

家族からは、
○小学校時代
・どもると嫌悪の情を示された。
・どもりではないと言い聞かされた。
・どもる度に注意された。

・冷淡で、物笑いの種にされた。
・ゆっくり話せと言われた。
・矯正所につれていかれた。

○中学校時代

・嫌悪の情を示された。
・どもっても注意されなくなった。
・先生に相談してくれた。
・どもっても気にしないで接してくれた。
・ゆっくり、はっきり言えと言われた。

○高校時代

・ゆっくり話せと言われた。
・まったく放任であった。
・無関心。
・そのうち良くなるだろうと言われた。
・話をまとめておけと言われた。

友人、その他の人びとからは、

○小学校時代

・あまり気にされていない。
・〝変な人〟〝だまり屋〟と思われていた。
・よく笑われた。
・物笑いの種にされた。
・からかわれた。

○中学校時代

・あまり気にされていない。
・もっと落ちついてと言われた。
・友人はいなかった。
・物笑いの種にされた。
・無関心。

○高校・大学時代

・あまり気にされていない。
・どもった方が愛情がわくねと言われた。

・早口を注意された。
・無関心。
・どもってもよいから話せと言われた。

（東京言友会　昭和四五年『理研報告』第二号）

家庭、学校、近隣がどもりに対してどのような態度をとってきたかの一端を知ることができる。

程度の差はあるにせよ、友人や兄弟にからかわれたり、学校では教師さえからも拒否された体験を持つ者は少なくない。

A氏は、小学校五年の時、号令をかける番があたっていた体育の時間にどもって声が出ず立往生してしまい、その時に、教師から、

「お前、俺をばかにしているのか」となぐられたと言う。

国語の時間、どもっているのをからかうために教師が何度も何度も指名し、非常につらかったとB氏は話す。

現在はさすがにそのような教師はいなくなった。級友もまた面と向っては、どもることをからかったりしなくなった。成人吃音者がかつて味わった苦痛は表面的にはなくなったと言

える。

では、実際に同級生、教師は吃音児をどう見ているかの報告を見てみよう。」

吃音児を友人はどう見ているか

大阪府下の小学生・中学生（約七〇〇〇名）に岸本哲氏が意識調査をした。どもりの人やどもりのお友達のことをどう思いますかの質問に次のような結果が出ている。

◎気のどく、かわいそう、みじめ。◎からかったりばかにしてはいけない。
◎早く治ったらいい、早く治してあげたい。◎治そうと努力しているのを見て感動した。
◎何かしてあげられないか。◎治す方法を早く考えてほしい。◎治す学校を作れ。
◎いやだ、不愉快、いらいらする、うつりそうな気がする。◎病気だから仕方がない。
◎おもしろい、愉快だ、ばかみたい。◎努力して治すべきだ。

この結果を岸本氏は次のように考察している。

「この結果は吃音児にとって大変希望的なものである反面、苦しい状況であることをも示している。無関心な友だち、積極的に吃音児の立場に立って、よき友だちとなるよう努力して

いる友だち、吃音児の努力も考えないで足をひっぱっているような友だちと、三者三様である。

しかしながら、一〇人の友だちや、吃音児・者自身の努力の成果も、ただ一人の友だちのために無駄になることが多いことを考えた時、われわれは、次に必ず打つ手を見い出さなければならない。このようなことは、単に吃音児教育のみに限られたものではなく、教育の基本的な問題であることを再確認した」。

（第一回吃音問題研究集会資料集　昭和四七年）

成人になった現在でも悩みが解消されずにいる成人吃音者には、過去に、どもりに関する暗い、いやな体験をしている人が実に多い。それらの体験を積み重ねるにしたがって吃音者自身も、「どもりは悪いもの、劣ったもの」という意識を強めていくのである。

山川夏雄

2　とらわれへの軌跡

いま私は

暗い会議室の中で、私はひとり思いに耽ります。満たされぬ心をあらぬ空想でいやすのです。人前でほとんど話せないほどひどいどもりの私は、同僚ともなじめず、昼休みになると自分の世界を求めて、誰もいない図書館の会議室にこもるのです。

時折足音が聞こえると、私はびくっとしてしまいます。誰かが部屋に入ってくるのではないかと、足音が消え去るまで息を殺してしまいます。

足音が去っても私のおびえは去りません。どもっていやな思いをした記憶の多さから人間不信になっている私は、ただ人と顔を合わせるだけで恐怖を覚えるのです。

ある大学の図書館に勤めて三カ月。私は人の視線さえ恐く、職場へ通う毎日が、針のむしろにすわるような苦痛に思えるのでした。

幼い頃から

幼い頃からどもりがちで気の弱かった私ですが、子供の頃の表情に暗さはありませんでした。神経質ではあっても運動が好きで、小学校に入ってからも元気な子供でした。

どもりを気にするようになったのは、友だちにどもりをからかわれていやな思いをした四年生頃からでしょうか。少しずつどもりは重くなっていき、六年生の学芸会では、ひどくどもって大恥をかいてしまいました。

中学の時には、出席をとられて返事が遅れ、「目の前にいてなぜすぐ返事をしないのか」と先生にどなられたこともあります。いやいや学級委員長に選ばれた私は、授業始めの「起立」という号令がかけられず、みじめな思いをしたこともありました。また、国語や社会の時間に本を読まされ、どもって困ることもたびたびでした。

こうした経験が私をだんだん消極的にしていきました。どもりは恥ずかしいいやなものだという思いにとらわれていったのです。

どもりを治そうとして

中学時代、どもりに対するひけめを持ってはいても、私は周囲に受け入れられていました。ところが、高校に入ってからは先生に親しみを持つことができず、友だちにも心を許すことができなくなっていきました。受験々々の雰囲気の中で、私はとり残されたような気分になっていったのでした。

先生も生徒も知らない人ばかりの中で、私は自己紹介で恥をかき、出席をとられて返事ができませんでした。もうどもることは単なるひけめどころではなく、切実な問題になりました。なにより出席をとられて返事のできないことが、それ以後堪えられない苦痛になっていったのです。

高校一年生の夏休み、母に勧められた私は大阪のある矯正所へ行きました。私はどもりで悩んではいたものの、矯正所へ行くのはあまり気が進みませんでした。どもるのがいやで矯正所へ行くにも不安を感じていたからですが、自分をどもりだと認めて矯正練習をすることに抵抗を感じたからでもあったのです。

矯正所では発声練習、呼吸練習を中心に、皆の前に立ってスピーチの練習などもしました。息を思い切り吸って口を大きく開け、ゆっくり話すのがそこの方法でした。

確かにこの方法で話せば、その時はほとんどどもらないものの、ほかの場所でこれをやる勇気は、私にはありませんでした。このような特別な方法でなくても、どもらずに話せないかと私は悩みました。

夏休みが終わって学校生活に戻った頃、私は話そうとしてどもると、舌が出るようになってしまいました。おそらく矯正所で練習した結果、どもらずに話そうと神経質になり、余計緊張してしまったからだと思います。

ともあれ舌が出るようになったせいもあって、話すのが以前にも増して恐くなった私は、友だちから少しずつ離れていきました。自分の殻を作り、ひとりの時間を持つことが多くなっていったのです。

三年生の春休み、大阪へ巡回に来ていたある先生に再び矯正を受けることになりました。

さほど期待はしていなかったものの、あわよくばという気持があって出かけたのでした。

その先生は、気力を充実し、思い切って話していけばどもりは治ると説明しました。そして、街頭で知らない人に道を尋ねる実地訓練を私に勧めました。しかし、知らない人に話しかけるのがとても恐かった私は、家で朗読をするくらいでお茶を濁していました。

そんな時、中学校の同窓会がありました。高校に入りだんだん孤独になっていった私にとって、中学時代の友だちはかけがえのないものでした。しかし、そこでもみんなと思うように話せず、ひとりとり残された気持になった私は、このままでは全く孤独になってしまう、なんとかしなければと思いつめました。勇躍決意を固め、私は街へ練習に出かけました。

最初は人に声をかけるのが恐く、通行人を何度もやり過ごしていました。しかし、だんだん焦ってきた私は、人通りの少ない道を選び、やさしそうな人をみつけて話しかけたのです。うまい具合に少しもどもりません。この調子だ、まだまだ恐いけれど、そのうち慣れてくるだろう。私はそう思い、どんどん話していこうと思いましたが、恐怖を克服するのはむつかしく、結局その日は三人だけで終わってしまいました。

二回目は少し慣れてきたのか、六人まで話しかけることができました。やはり道を選び人を選んではいましたが、少しずつ慣れてくる感じでした。

驚いたことに、家や学校でも以前よりどもりが軽くなっていきました。授業で出席をとら

れても返事ができるようになり、やはり効果があるのかと感心していました。

ところが、少しどもらなくなった私は、この次どもるのではないかと、かえって不安を持つようになり、再び話すのが恐くなっていったのです。

ある時、私はひとりの男の人に道をたずねました。ところが、なかなかことばが出ず、私は慌ててしまいました。その人のうさんくさそうな表情を感じながら、私は必死に言おうとしました。結局なんとか言うことはできたものの、それを機に話しかけるのが決定的に恐くなってしまったのです。

しばらく期間を置いてまた街へ出て行きましたが、話しかける恐さを振り切る気力はもう残されていませんでした。

私はこれ以上続けられないと思いました。自分は根性がないのだと情けなくなりましたが、一方で肩の荷が降りてほっとした気分にもなっていました。

この挫折によってどもりはまたひどくなっていきましたが、それ以上に自分に自信を失ない、ますます殻に閉じこもるようになっていったようでした。

殻の中で

高校を卒業し、大学受験に失敗した私は浪人をすることになりました。先生から当てられ

ることもなく、本を読まされることもない予備校通いは、気楽なものでした。この頃になると、友だちのないことがかえって気持を軽くし、毎日が楽しいとはいえないまでも、どもりの不安からは解放されていました。

この時期は吃音矯正の練習など全くやる気にならず、ラジオを聴いたり好きな本を読んだりして、自分の世界に閉じこもっていました。将来に対する展望もなく、また不安もありませんでした。自分の生き方について真剣に考えることなく、現状の安逸の中で自分を動かしたくない私だったようです。

空想へ逃げ込んで

中学の頃まで勉強も運動もよくできた私は、心の奥に高いプライドを持っていたようでした。そのため、どんなに殻に閉じこもっても、何かで認められたいという欲望を、私は消しえませんでした。高校の後半から浪人時代にかけて私は小説を書き、作曲をし、自分を大作家、大作曲家にみたてることで、代償的な満足を求めました。空しい空想の中に慰安を見出すようになっていったのです。現実から逃げ、空想に引きこもった私は、行動への気力を失っていきました。ただ自己を主張したいというプライドの空回りのみが、現実へのあがきのすべてだったのです。

サッカー部で

何かで自分を主張したいという気持の現われだったのか、一浪して入った大学で、私はサッカー部に入りました。どもる自分のみじめさをプレーで相殺しようと、私はサッカーに打ち込んだのでした。

その頃、私は相変わらずひどくどもり、話す時には舌が出て困っていましたが、下級生のうちは同じ学年の連中がまとまっていて、それほどの疎外感は持っていませんでした。ただ心配だったのは、先輩と出会った時のあいさつでした。上下関係の厳しい大学の運動部であいさつができなければ大変です。私はできるだけ先輩と出会わないよう、駅から大学まで遠回りして行ったり、先輩のいそうな所を避けて通ったりしていました。

上級生になると私は時々試合に出ました。しかし、サッカーの試合では、ボールを味方にパスする時やパスを受ける時、声をかけねばならないのです。私は声をタイミングよく出すことができなかったのです。そのため私ひとりがチームの中で孤立し、スタミナのないせいもあって、途中でよく交代させられました。

プレーがうまくいかないこともあって、私は自分に自信を失ない、人間関係でもだんだん卑屈になっていきました。表情はますます暗く陰気になり、どうしたわけかひとりでいるこ

とに以前の気楽さはなく、ただ苦悩が増すばかりでした。

再び治そうとしたが

大学時代には吃音矯正の実地訓練を時々やりました。高校の時にやって、一時的に効果のあったことが頭にあったからです。ところがある時、通りがかりの人を呼び止めて道をきこうとすると、ことばがつかえて舌が出、そのまま声が出なくなってしまったのです。舌を出したままもがいている私を見て、相手の人は気味悪がり、けがらわしい物でも見たように逃げ出してしまいました。私はとてもばつが悪く、穴にでも入りたい気持でした。言いようのないほどのショックでした。それからは恐くて実地訓練ができなくなってしまったのです。

みじめな社会への門出

四年生になりました。早い人はもう就職試験を受けて、通ったとか通らなかったとか、かまびすしいことでした。私はその頃、まだまだ試験を受けようとはしませんでした。面接が恐く、受けてもどうせだめだという気持があったからです。それに就職してからのことを思うと、すすんで就職したいという意欲もわかなかったのです。

秋になっていよいよせっぱ詰まってきた私は、恐る恐る三カ所ほど受験してみました。

面接ではひどくどもりました。重苦しい雰囲気の中でこちこちになり、ほとんど話せないような状態でした。受験はすべて失敗でした。

冬が来て次の年になっても、就職は決まりません。私は就職を引き延ばして、その間にどもりを治さねばと考えていました。しかし、治るという確信をもはや持てなかった私は、前途になんの希望も見出せないまま、暗い毎日を送るしかなかったのです。

二月の半ば、知人の紹介である大学の図書館に入れそうだ、ということを聞きました。私は就職した後のことが不安でしたが、どうにでもなれという気持で就職することにしました。こんな自分を採用してくれる職場に申しわけなく思い、実力で入らなかった後ろめたさも感じていました。なるべく人には迷惑をかけず、細々と生活していこうと思いました。恋愛も結婚もあきらめていた私は、自分ひとりの世界を大事にしていこうと考えました。

こうして私の社会への門出は、人生への惨めな諦めから始まったのでした。（第五章4参照）

村上英雄

3　十秒のあいさつ
――去来する不安との闘い――

吃音者は、ちょっとしたつまずきでどもって失望感や不安感に悩む。私自身、離任式（学

校で教師が転勤のため全校生徒にお別れのあいさつをする式）という絶体絶命の場に立たされ、不安が募り身も細るほどに悩んだ。その時までの様子を日記によって振り返ってみた。

三月二十六日

教職に就いて一年目。初年度の修業式も終わってほっと一息して、机に坐ってお茶を飲んでいると、教頭が近づいて来て、

「送別会と八日の離任式には、必ず出席して下さいよ」と耳打ちした。

「はい、わかりました」と、何のためらいもなく口から出てしまった。隣の同僚の先輩が聞いていて、離任式は、ひどく緊張してしまうことを、私に話してくれた。普通の人でも緊張するのに、まして、どもりの私がうまく言えるはずがないと思ってしまう。一年前、私が新任して着任したのと入れ替わりに、転勤されていった人びとの離任式でのあいさつが思い出された。

七百余名の生徒の視線を一身に浴びて、お別れのあいさつをする、極めて厳粛な儀式であった。

短いあいさつでもどもらずに話すことは、私にはまず不可能に思えて、不安が広がる。しかし、去年の離任式には、用事で出席できなかった人が半数以上もいたことに気づき、なん

とか用事をみつけて欠席すればいいと思いつく。ここで不安は解消でき、忙しさに追われて考えなくなってしまった。

三月二十七日

新しい勤務校発表と面接のため、会場の高校体育館へ赴く。二百余名の新任が体育館の演壇に向かって坐って待つ。離任式もこんなところでやるのかと思うと、とたんに不安が私の体中に押し寄せてきて、折からの寒さに加えて、こきざみに震えが起きだし止まらなくなる。

三月二十八日

新しく行く職場の抱負など、いろいろと頭の中に思い浮かべてみるのだが、時どき離任式のことが脳裏をかすめ、憂うつになってしまう。思いきって出席し、晴れ晴れとあいさつして、自分の教えた生徒と一人一人握手をして別れたいと思うのが心情だろう。そんなことで悩みぬかねばならない自分がいやになってしまう。そして、なんとかどもらずにうまく話す方法として、小型のテープレコーダーに吹き込んで、口だけ動かしてみてはと思ったりする。

三月二十九日

家にいてぶらぶらしていると、頭に浮かぶのは、離任式のことばかり。「うまく言える」「いや、言えない」ああでもない、こうでもないと少し悩んでは立ち消えることが、このところ日課のようになってしまっている。

三月三十日

ノーベル物理学賞を受けた江崎玲於奈博士は、小さい時から重いどもりで、今でもどもっているとのことであったし、テレビでもその様子を見ることができる。しかし、苦しそうにどもりながらも、自分の主張をしっかりと述べ、自信のある物おじしないその態度に、なんとなく勇気が湧いてきたようである。

三月三十一日

NHKテレビの「勝海舟」を見ていたら、島田正吾が口をやや左に下げながら、気張った口調で話していた。離任式の時も、彼のように口を力ませて話したら、しゃべる時に気がそちらへそそがれて、うまく言えるのではないかと考えたりする。とりあえず、送別会のあいさつで練習しようと、早速寝床の中でも口元を力ませながら、歯に口肉をかませたりして言ってみたりする。

四月一日

午後から新しく勤務した職場の会議があり、まず全職員の自己紹介から始まった。前任校と名前、それに簡単な抱負を述べるだけのものであったが、近づいてくるに従って、自分の言う事柄に思いを巡らすようになり、人の話は満足に耳には入らなかった。

「大垣南中から参りました村上と申します。経験といっても、わずか一年しかない未熟ものですので、新任同様にご指導をよろしくお願い致します」

こんなせりふを早速考えて何度も頭の中で繰り返し言う。雰囲気はよかったが、中にはよく知っている人がいるので、その人に自分のどもりが気づかれては恥ずかしいとも考える。大垣の「オ」が言い難いので、村上の「ム」から切り出そうと思いつく。名前を忘れて話していた人もいたので、

「肝心の名前を忘れるといけませんので、まず名前から申します」

と言えば、ユーモアがあって爆笑するだろうと思ったりするが、そんなにスラスラ出るはずがないとも考えてやめる。

とうとう私の番になってしまった。席を立つが、足も床についていないようで、体が自分のものではない感じを受ける。不安がさっと頭の中をかすめる。もしや……恥ずかしい思い

をしなければ……。礼をして頭を上げ、村上の「ム」を言おうとするが、出てこない。人の顔が満足にわからないのに、何か熱い視線を感じる。「マ、ミ、ム」と五十音順に軽く口ずさみながら出そうとしても、肝心の「ム」が出てこない。この間五秒の沈黙だった。口ずさんでも出ない私の顔は、きっと何かにあがいている、とてもみっともない顔つきに見えたのであろう。私のまん前に坐って私の顔を下からみつめていた二人の若い女性が、クスクスと笑いだしてしまった。つっ立ったままで何もしゃべろうとしない男と、前で大笑いする女性。なにが起こったのかと全員が首をこちらへ向けてきた。ところが、私は二人に笑われて、不安や恥ずかしさが一度に吹き飛んでしまった。妙に心が落ち着き、胸につかえていた息が出てしまって、新しい気分にたちかえる。そして、あらためて礼をして、大きく足を横に動かしながら、

「村上と申します」

ことばがスラスラと出て来たのである。次に予期しないことばが出てしまった。笑われてしまった私は、そのことを弁解しようとしたのか、

「私は、どもりで二〇数年間悩み続けてきまして、今なお克服をめざして頑張っています。ご迷惑でしょうが、よろしくお願いします。南中での経験はわずかですので、ご指導よろしくお願いします」と言ってしまったのである。席に坐って、やっと自分自身に立ち返ったよ

うな落ち着きをとり戻す。自分のいやな恥ずかしい面を、この時にすべてはき出した感じで、何か胸につかえていたものがなくなり、すっきりする。

「自分はどもりで悩んでいます」

と、こんな場で言ったのは、もちろん初めてである。言おう言おうと観念的にはわかっていても、実際逃避したり、ごまかしたりして、いつも切り抜けたりしていた自分を顧りみて、

「やった！　言ってしまった」

という成功感を体に覚えるようになる。

「どもりと言われるけど、ほとんど気づきませんよ」

「うまいしゃべり方ではなかったですか」

会議が終わって、回りから同情や慰めみたいなことばが私に寄せられた。

自分のどもりを公表したことで、肩の荷がすっかりおりて、これから何も気にせず仕事に打ち込めると思うと、自信が百倍にもなってくるように思われる。

四月二日

自分の恥ずかしいものをさらけ出しても、翌日になると考えが微妙に変ってきた。顔を合わせる度に、相手の視線が妙に気になり、笑っているような、軽蔑しているような風に自分

で受けとめてしまった。昨日の成功感とはうって変って、敗北のような感じであった。自己紹介であんな軽卒なことをよく言ったものだと思われているのかもしれないと考えたりする。自分から話しかけることもなく、黙りこくっていた。

四月三日

辞令交付を受けにセンターへ行く。交付後次々と講話が始まる。その中のある講師が、フォード成功五訓の印刷文を全員に渡し、読むように指示した。誰がいいかと三〇〇名の名簿を手にとって無作為に番号を選び出された。急に私の不安が高まった。「もしや、私の名前が呼ばれ、読まされるのではないか」「いや、三〇〇人だから、まず当たるはずがない」

あれこれと考えるうちに、不安は高まり、頭の中は当たったらどうしようということばかりになってしまう。ひとりの名前が呼ばれ、自分でないとほっとした。次の不安がまた湧き、またほっとする。このようなことを繰り返しているうちに五人が読んで、すべてを読み終えてしまった。

四月四日

研修に今日もセンターへ行く。分科会に分かれて話し合う。手を上げて意見を述べようと

するが、そんな勇気もなく、自分がこう言えば皆の共感を呼ぶのではないかと、事柄だけを何度も頭の中で言ってみたりする。考えていると、話は次つぎと展開していき、自分の考えている事柄は、すでに合わないようになってとり残されてしまう気がする。こんな事を言ったら笑われてしまうだろう。どもらないだろうかと、とめどもなく考えが入り乱れ、ついに発言はできなかった。

四月五日

研修の三日目。講師が自分の言ったことを覚えさせるために、同じことを当てて言わせる。全体会なので、三〇〇分の一、まさか当たらないだろうと思いつつも、一昨日と同じような心境におちいり、不安は深まる一方であった。三〇〇人の中で身を縮みこませ、ただ当たらぬように祈るだけであった。その甲斐あってか、なんとか当たらずに済んだ。

四月六日

今日は予定がなく、体を休めることができた。しかし、暇になると、もう考えることは明後日の離任式のことばかりである。今ではもうどうしたらうまくいって、その場を切り抜けるかだけである。言いにくい言葉、どもりやすい言葉を省いて、言いやすい言葉に置き換え

てみようとする。できるだけ長話を避け、短かくまとめようとする。反面、こんな短かいとよけい笑われるのではないかと思ったりする。講堂の正面横の額をさして、それについて話したり、毛筆で大きく書いた紙を提示した人が昨年あったので、自分もそうしてみようかと考える、しかし、ただ考えるだけで実際の行動には移さなかった。

四月七日

もう明日に迫ってしまった。朝から考えは離任式のことばかり。一室に閉じこもって、あれこれと考えたりする。もう日数はなく、精神的にかなり追い込まれ、ここ二、三日でだいぶやせたように思える。

ふと誰かがしていたように、手話を使って話したらと思う。早速本をとり出して、

「一年間、お世話になりました。何事も努力です。頑張って下さい。」

という短い文を手話を使って、一字一字練習する。熱心に練習をしたが指が思うように動かず、もたついてばかり、結局あきらめてしまう。昼頃も手話の次にかつて言友会でやった発声練習のことが思い浮かび、ゆっくりと大きい口形で、腹式呼吸を使ってやれば、必ずうまく言えると自分を思いこませる。不安はつきないが、なんとかいけそうだと、自分に暗示を与える。思いつきにすぐ動かされる自分を情けない奴だとつくづく思う。

四月八日

いよいよ離任式の当日になってしまった。今日着ていく服のことや、午後からの新しい職場での仕事など、別なことばかり考えて気分を紛らわそうとつとめた。しかし、時々風邪で欠席との電話をしたら、という考えがさっと浮かぶ、逃げるのなら今だと思うと、本当に考えこんでしまう。

結局は逃げる勇気もなく、時間に追いかけられるように出かけてしまう。行く途中でも、ここらで逃げようと何度も思う。いろいろ考えているうちにもう校門についてしまった。なぜ来たのか？　すぐ前に大きな不安が横たわって、恥をかくに決まっているものをと、自分でない自分を叱責したりした。

式の前に別室へ案内されて休んでいると、もうなるようになれといった感じになる。運を天に任せた。しかし、ここまで出て来た自分に感心もする。

いよいよ式の時間になった。案内されて講堂に入る。生徒がすでに静かにして待っていた。不安に負けまいと胸を張って歩く。

五分もかけた先輩の落ち着き払ったあいさつに感心する。やはりあれくらい内容をかけてしゃべるのが本当なんだろうと思う。

いよいよ私の番となった。名前を呼ばれ、階段をひとつひとつ踏みしめながら登った。すでに皆の視線が背中にあることを感じた。演壇の前に立つが、前がはっきりわからない。司会の人の、「礼！」という大きな声に合わせて、七〇〇人の頭が一度に見事におじぎをした。私もおくれて礼をした。私が頭をあげると、すでに七〇〇人の頭は起きていて、おくれて上がった私の顔をみようとして視線が集中した。調子が狂ったのだ。極度にあがってしまい、これまで練習してきた言葉が全く出てこない。ただ言葉を出そうと、右足を大きく右に動かすと、自分でない自分の口から思ってもみなかった言葉が飛び出したのであった。

「ファイト、ファイト」

次の「頑張って下さい」の「が」が出てこない。再び、右足を右後方に大きく動かしてみる。司会の人が動いた私をみて、終わりの礼だと直感したのか、「礼」と大きな声でいってしまわれた。私はあわてて、

「以上簡単ですが、終わります」

やや頭をおくれて下げながら、一気に言った。その間わずか数秒であった。このわずか一〇秒でも一時間、二時間もの間、壇上にさらされていたようで、体が熱くなっているのを覚える。

考えもしなかった思いがけない短いことばに、バツの悪さを感じながらおりる。もうこれ

で終わってしまったという安堵が心の中を支配して、これまでの悩みが一度に吹き飛んでしまった。もう体の中には、張りつめたものはない。生徒と一人一人握手をして帰るとき、やはり来てよかった。悩んだけれど、そんなに恥などかきはしなかった。とにかく逃げないで来た自分になんとなく誇りがもてたようであった。

4　どもり矯正所へのあこがれ

松本　進

A矯正所との出会い

新聞の漫画の下の方に、矯正所の院長の顔写真といっしょに「どもり、赤面恐怖」云々と宣伝していたA矯正所を知ったのは、小学校高学年の時だった。

私は小学三年の時からどもりはじめ、ずっと悩んではいたが、「何としても治したい」と深刻に考えはじめたのは中学二年の時が初めてであった。全校朝礼で、号礼と「今週の目標」というのを発表する週番の役目が近づいたのである。

思いきってA矯正所へ案内書請求のハガキを出した。すぐにきた返事には、当時の私にと

ってはかなり高額な本の紹介があった。本を郵便で買うという慣れない買い物だったが、こずかいをはたいて思いきって買うことにした。

それからの毎日は、その本が到着するのを今か、今かと待つ日々だった。一カ月近く待って私が本を手にしたのは、偶然にも、来週から私が週番だという、その前の土曜日だった。昼、学校から帰って、家族からその本を渡された時は飛びあがらんばかりに喜んだ。と同時に、これで週番がうまくいくとホッとした。家族がその本のことを尋ねたり、無断でそのような買い物をしたことをなじる声を、「むこう（矯正所）から勝手に送ってきたんだ」などと適当にごまかし、大急ぎで二階に持ってあがった。

二階で一人きりになり、かなり厚い本を、難しい漢字も何とか意味をとりながら、二時間ほどで一気に読んでしまった。

本には、矯正の技術的なこと、精神的なこと、それにその矯正所を訪れてどもりが治り、成功した人の多くの例が載っていた。各地の弁論大会で、優勝したという人たちの体験談が多く載っていた。その人たちの体験談、どもりが治った人の矯正所への礼状が、「僕も、もうじきあんなになれるんだ」という希望を与えてくれた。本に載っていた矯正所の建物や、いろんな測定器具の写真が非常に頼もしく私の目に映った。その日までいつも頭のどこかにかぶっていた黒い雲が、きょうから取り払われて、目の前がパッと明るくなった感じだった。

矯正練習を始める

その土曜日の夜、早速、本に書いてあった通りに、腹式呼吸と発声練習をした。家の者に気づかれぬよう、できるだけ静かに練習をした。「この方法で練習すれば本当に治るのだろうか？」という不安と、「これを徹底的にやったら本に書いてある人たちのように、雄弁になれるに違いない」という期待が交錯していた。

土曜、日曜と懸命に練習した成果かどうかわからないが、月曜日の全校朝礼では、壇上に立っても不思議に落ち着いていた。そして一言もどもらなかった。残る二回の全校朝礼もうまくいった。この成功は私を有頂天にさせ、このまま練習を続ければ、私のどもりはすっかり治るんだ、という確信みたいなものを与えてくれた。以来、その矯正所の本は私にとって一番大切な本、バイブルとなった。

本には、所要時間といっしょに、毎日続けてやる数種類の練習法が載っていた。はじめの二週間くらいは毎晩練習をした。しかし、つい面倒臭くてさぼる日が出てきて、翌日、国語か英語で当てられそうな時だけ練習するようになっていた。どもりは以前とあまり変りなく、授業中当てられそうになると胸は高なり、言いづらい音ではどもった。

そんな状態が、高校に入ってもずっと続いた。学校で失敗した日などは特に、矯正練習を

さぼり続ける自分が情けなかった。それでも、いつかは治るはずだという考えは変らなかった。そして、「本に書いてある通りに練習すれば必ず治るんだ」という考えは、「自習では効果がなくてもA矯正所へ直接行って、そこで先生の指導を受けながら練習すれば治るに違いない」という希望に変っていった。本には「この本を読んで自習するより、直接来院して治療に励んだ方がより効果的だ」とあった。

高校も二年、三年となり、社会へ出る日が確実に一歩一歩近づいてくるのを避けられない運命として、身近に感じ始めた頃、「このままどもりが治らなかったらどうしよう。将来会社に入っても仕事がうまくできないに違いない」という思いに脅かされた。大学へ進学することに決めていた私は、社会人となるまでにあと四年間の猶予が約束されていた。大学を卒業するまでには絶対にどもりを治しておかねばならない、と痛切に感じていた。

大学受験

私は目標の大学を、内心秘かにB大学にしぼった。それは、A矯正所がB大学のすぐ近くにあったからである。今から思えば、A矯正所に通うのなら、東京都内ならどこからでも可能である。しかし山口県の片田舎に住んでいた私には、東京の交通の便利さまで考えが及ばなかった。受験シーズンが近づくにつれ、「僕のどもりを治すためには、B大学へ入らねば

ならない」と、ほとんど強迫観念のように自分に言い聞かせ続けた。私の受験勉強へのエネルギーは、B大学へ入り、A矯正所へ通うという目標から生まれていた。

大学で特に学びたい理由は何一つ考えられなかった。ただ、A矯正所へ通えることと、のんびりとした自由な下宿生活、これまでのようにどもりに脅えなくてよい生活があこがれだった。結局、一年浪人しても、受験したB大学の延べ五学部は全て不合格で、同じ都内のC大学へ入学した。

高校時代、私はまずまずの成績で、三年の時の担任は国立大学の受験を勧めてくれていた。しかし、三年の夏場から私は、国立大受験に必要な数学と理科の勉強を全く放棄し、密かに国立大学を諦めた。そのことは誰にも言わず、形だけ国立一期校と二期校を受験し、予定通り落ちた。その頃、東京のA矯正所は私の明るい未来への唯一の通り道だったのだから、間違っても地方の国立大学に合格などしてくれたら、困ったのである。

学生生活を送るため、東京へ出発した時のカバンの底には、中学生の時に買った、手あかに汚れたカバーのA矯正所の本が大切に収められていた。その時もまだその本は、私にとって最も大事な本であった。

東京に着いた翌日、私はその本を抱えて、A矯正所へ行き、長い間あこがれ続けてきたその建物を初めて目にしたのだった。

第二章

しかし、どもりを治そうとする努力は、古今東西の治療家・研究者・教育者などの努力にもかかわらず、充分にむくわれることはなかった。それどころか、自らのことばに嫌悪し、自らの存在への不信を生み、深い悩みの淵へと落ちこんでいった。また、いつか治るという期待と、どもりさえ治ればすべてが解決するという自分自身への甘えから、私たちは人生の出発（たびだち）を遅らせてきた。

1　民間のどもり矯正所でどもりは治るか

伊藤伸二

どもりは治る

電柱に貼ってあるビラや看板で、また雑誌の広告の中で〝どもりは治る〟というどもり矯正所の宣伝を私たちは目にする。本屋では〝どもりは必ず治せる〟〝どもり最新治療法〟なる本を見かける。また、新聞の学芸欄では、ことばの教室でどもりが治ったという報告やどもり矯正家の治した報告が目に入る。新聞の情報のほとんどは、どもりはこのように治った、また治せる、治す方法についての記事である。

この〝どもりは治る〟という情報は、まさに吃音者にとって唯一の救いであった。私たち吃音者は、その矯正所に行き、そこで治療を受ければ、これまでの暗い人生がバラ色になると思っていたのである。

楽石社

〝どもりは治る〟と組織的に宣伝がなされた歴史は、七〇数年前にさかのぼる。それは、日本における吃音問題解決のための歴史の始まりでもあった。

東京師範学校長や東京音楽学校の初代校長を歴任した教育家伊沢修二が楽石社の事業を開始したのは明治三六年のことであった。

楽石社は、もともと吃音矯正を主な目的として発足したものではなく、正しい日本語や英語を教えたり、方言を矯正すること等を目的として発足した。しかし、その楽石社の募集に応じたのは吃音矯正の希望者ばかりであった。

伊沢のあみ出した矯正法は①呼吸練習――腹式呼吸法　②発声練習――「ハヘホ」練習、③精神強化訓練――精神統一等による吃音恐怖症の解消の三つにまとめられる。創業六カ月で二百名の吃音者を矯正し、その結果を恩師に次のように報告している。

「小生は本年五月此事業を開始し、今日迄に百九十三名の吃音者を矯正致し候。各患者に就き要する時日は種々にして、最も短きは唯七回に過ぎず、最も長きは二十回を責せり。その一回は各一時間を限りとす。其中全く治癒し能はざりしものは唯二人のみにて、其他は小生の指導の下に全く過程を練習し終り、何れも殆んど全治の効果を奏したり」

（信濃教育会：伊沢修二選集――昭和三三年）

明治三九年九月には矯正者千名、明治四三年には二千名の達成の記念会を開いている。伊

沢は二千名の吃音矯正を行なった経験をもとに、その効果と限界を明治四四年二月に開かれた楽石学院新築落成記念会の演説で述べている。

「先づ以てハヘホの練習で咽の縄をといてやると云ふと楽になりますからして始めて落着くことができる。そこで精神の修養も出来る。先づ障碍を取ってから徐々と精神修養も積み然る後に此の発音器官を自由に使はせると云ふ方法でやる。そこで先づ二週間も致しますと云ふと、一通りの障碍も取れ、あと一週間も尚母韻練習や会話の練習をしますると何でも言へるやうになる。そこで先づ出してやる。出してやるが何時も私が訓戒してやることは、決してこれで直ったとは思ってはならぬ。十年、二十年、三十年も吃って居た人が今直ったからと云っても後を練習せぬと云ふと又再び起るからして能く練習しろと云ふことを言ってやる。所が吃る人はそれが治ると非常にうれしい。今迄で締められて居た咽が解かれて自由に何でも言へるから是程嬉しいことはない。非常に嬉しい感じと共にもう其で自分が十分直ったと云ふ心持がするから不養生したり、平日訓戒して置いたことに背いたりやる。是は吃が再発しないなどと思ふ為であろうが決してさう云ふものでない。吃りと云ふものは吃る原因があって起るのだから、其の原因を取ってやれば直る。併し又其の原因を再び自ら拵へれば又吃るやうになるのは当然の話である。併しながら此処で矯正し

た者の中、三週間ですっかり直ってしまったと云ふ者も随分ありますが、それを原則と心得てはならぬ。大抵は其の後二、三ケ月位の練習を要し、最も長いものは一年もかかっても尚確実に直ったと言ふことの出来ぬものもある」

（信濃教育会：伊沢修二選集―昭和三三年）

ここで注目すべきは、指導によってほとんど全治したと二百名の吃音者を矯正した実績を報告した伊沢が、二千名の指導をした後では「治っていないどもり」も認めていることである。つまり、吃音矯正終了後のどもりの再発を十分認めているのである。そして、その再発を防ぐには、吃音者自身による「どもりは治る」という強い信念と、日常の生活での絶えまざる努力にかかっているとしている点である。

これは、現在の民間のどもり矯正所とかなり似ており、吃音者が矯正所終了後、何度も繰り返し矯正所を訪れるのはこのあたりの事情からくる。つまり、矯正所ではどもらずに話せたという自信は必ず治るという信念を強化する。しかし、再発したら自分自身の努力が足りなかったと考え、再び矯正所を訪れるのである。どもりで悩んでいる人が四回、五回と矯正所行きを繰り返すのは稀なことではない。

治すという前提

吃音矯正事業創立の動機も、楽石社とそれ以後の矯正所には共通するものがある。それは〝どもりをなんとかしたい〟という吃音者への強い愛情から出発している点である。伊沢は実弟のどもりを治したいという兄弟愛が一つの動機となった。伊沢以後の吃音矯正家では、自分自身が吃音者であったことが動機となっている場合が多い。すなわち、自分が治ったように他の吃音者にも治ってもらいたいという思いが出発となっている。

どもりを伊沢によって矯正され、後に楽石社の副社長となった松沢忠太は次のように熱情を吐露している。

「我が多年の暗愁・苦悩は、今やこの嬉しき快癒に際して猛然として一種の反動的責務の情を喚起せしめたり。乃ち余は是より我全生涯を傾けて、必ずや吃音矯正の事業に委ぬざるをべからず」

（上沼八郎：人物叢書・伊沢修二、吉川弘文館―昭和三七年）

松沢のように、自分自身が吃音者であった人は吃音者への愛情がとりわけ深い。そのために、「どもりを治す」ことに執着し、また自分の体験から「どもりは努力次第で必ず治る」と信じてもきた。

「治す」ことを前提に出発した吃音問題の歴史は、明治三六年以来その前提を変えてはいな

い。矯正事業開始の動機も、その内容も、そしてその効果も限界も約七三年間ほとんど変わってはいない。

そして、残念なことに、吃音者の悩みは解決されないまま続いている。どもり矯正所の終了者の実態調査をみても、完全もしくは、ほぼ完全に治った者は極めて少なかったことが報告されている。また、成人吃音者の団体である言友会に入会する人のほとんどは、一回または数回、どもり矯正所に行った経験を持っている。

「治す」前提を示され、「どもりは必ず治る」と宣伝された吃音者は、当然のこととして「治したい」と願う。そしてどもりを治す努力をする。自分で努力をして、または矯正所で指導を受けてどもりが治らなかったら、たとえ、一時治っても再発した場合は、吃音者は自分の努力不足を責める。さらには、「どもりが治らなくては自分の人生はない」とまで思いつめてしまう。これらの吃音者は、治そうと努力すればするほど悩みが深まっていくという悪循環の中に入りこんでいってしまう。

伊沢・松沢らの愛情が、かえって吃音問題の解決を遅らせる原因となってしまったといえよう。

2　言語治療教室で吃音はなおるか

佐世省吾

不可解な吃音

八月に別府市で五一年度の夏季カウンセリング・ワークショップがおこなわれた。私のグループにYさんという青年がいた。初日に、いろいろとYさん自身の心の悩みが出され、家庭問題など苦しい気持が吐露されていった。Yさんは、「これ以上、どうしても他人に言えない秘密がある」と言い、ついに泣き出してしまった。グループの人びとはそれから先、Yさんの秘密にまで立ち入ることはできなくて三日間がすぎた。

そして、偶然の出会いというか、夜中に私と二人で風呂に入った。二人でいろいろ話をする間、私はふと「私はどもりで大変困っている」ということをもらすと、急にYさんが心を開いて、「私も実はそうなんです。私のどもりは、私以外の誰も知らない。それで私は、絶対に人に知られまいとして必死なのです。しかし、それだけにことばの出ない苦しさはたとえようもない」と述懐してくれた。私もグループの人々も、まさかYさんの絶対に人に言え

ない苦しみが吃音であったとは、想像もできなかった。とうとう四日間、Yさんは自分が吃音であることを自分の口から他人の前で言わなかったし、グループの誰も気がつかなかった。

このように、吃音は他人からみても聞いても吃音とわからなくても、本人はそれで死ぬ程の思いをしている場合と、その反面、他人はどもりと思っていても本人はそれ程問題にしていない場合などいろんな在り方がある。両者が合意して吃音であるとかないとか言っても、場と時間がちがうとその在り方もちがうのがどもりの特徴である。この不可解なども りに対して公的な学校教育の場でのとり組みがはじまったのが言語治療教室である。

言語治療教室での現状

現在、わが国には、言語治療教室が全国で六三二ヵ所あり、（昭和五一年三月三一日現在、『NHKことばの治療教室』より）、小学校・中学校・教育センターなどの教育機関に設置されている。

これは、学校教育の立場からいうと、言語障害児のための特殊学級であるが、一般には「ことばの教室」と呼ばれており、通級制という形で学級経営がなされている。

この言語治療教室ができはじめて、すでに一〇年以上の歳月がたっているが、その量的発展を見ると、今から一〇年前の昭和四一年には、全国でわずかの二四ヵ所だったものが、五

年後の昭和四六年には約一〇倍、一〇年後の昭和五一年には二六倍の六三二カ所という驚異的、まさに雨後の筍のごとき増加ぶりである。

これらの言語治療教室では、吃音児のみならず、構音障害、口蓋裂、言語発達の遅れ、難聴、脳性まひ、声の障害まであらゆる種類、程度の主訴をもつ子どもたちがその対象となっている。

しかし、全体的にみて、吃音児が最多数を占めているようで、教室によっては吃音が全体の半数以上を占めているところもある。

なおりにくい吃音

それでは、これらの言語治療教室で吃音児に対して何がなされているのかを調査した結果を列記すると次のとおりである。

音読検査と称して教科書、劇の台本、紙芝居、スライド等を素材にして音読をしたり、読む練習をする。遊戯療法・本人との対話・電話機を使用しての訓練・録音しての話し合い・落語・即興劇・アナウンス教室・言語遊戯・ランゲージマスターの使用・リラックスな状態へ持ち込むための環境設定・本人や母親とのカウンセリング・サイコドラマ・ロールプレイング・催眠・自律訓練・行動療法・脱感作……等々その他の心理療法となっている。

これらのものがどういう目的で、何のためにおこなわれているかはそれぞれの教室でまちまちである。

結局、これらの方法を専門的に研究している人の知恵とテクニックを借りものにして、それを道具として、吃音をなおそうとしている。

なおるか、なおらないかわからないが、とにかくやってみようということである。うまくなおればよいが、なおらないときの責任はだれがとるのか、深く考えればおそろしいことである。

フロリダでは、なおらなかった子どもの親が当局を告訴したといわれている。

それでは実際に、これらの学級で指導を受けた児童生徒たちのなかで障害の程度が軽減されたり、除去されたとみなされたものがどれくらいあり、なおらないものがどれくらいかをみると、吃音についてはわずか四割のものがなんらかのかたちで改善されたとみなされ、あとの六割のものはよくなっていないというのが実情であった。これは、大分県下の言語治療教室六校の開級時から、昭和四七年度末までの調査の結果である。

もちろん、さきの四割は、どんな状態なのか、その時点ではよくなったとみなされても、一年後、二年後の時間的経過を考慮に入れたその子が「将来生きていく」という長い目でみた見地からのものではなかった。幼児の場合、数年後には吃音など忘れてしまったという事

例はあるが、それらは、はじめから吃音と呼ばれない方がよいわけで、とにかく吃音の予後はよくないといえる。

言語治療の教師とその研修

これだけ驚異的急増をとげている言語治療教室の実態の中で、言語治療を担当する教師の養成についてみると、今のわが国の現状では到底これに間に合うはずがない。研修の機会に恵まれたごくわずかの教師が、二カ月から一年の期間で研修が受けられる。その他の教師は、三月三一日まで普通学級を担当していて吃音ということをほとんど知らないまま、辞令発表と同時に四月一日から言語治療教室の担当になり、吃音児を集め、指導をはじめているという現状がある。

吃音というものが、一年か二年の研修を受けて、それで他人の吃音がなおせるぐらい簡単なものでないことは、明治の楽石社以来、古今東西を問わず、幾多の先輩のたどった跡をみてもわかることである。

このわかりきったことが、なかなかわからない状況である。

吃音を治療するということが、どんなことか定義づけることも、きわめて困難なことのなかでおこなわれている。通常、吃音児の言語治療といえば、吃音者の発語行動における非流

暢さの改善がその目的とされ、ことばのくりかえし、ひきのばし、ためらいをなくすることだけだと思われている。それがうまくいかないと吃音者のもつその他のいろいろな問題を解決してやることだとか、吃音者の行動や考え方をなおしてやることのように考えている人が多い。それのできる人が言語治療の教師であると自他ともに自負するところに大きなあやまりを見い出すことができる。

言語治療教室は吃音をなおすところではない

なんとなれば、吃音児の問題を解決してやるとか、なおしてやることができると考えることは、あまりにも安易な、あまりにも人間というものを知らない、もっともきびしい言い方をすれば「傲慢」な人間存在の本質をわきまえない態度であるとさえ言える。

このような態度がある限り、吃音はさらに再生産され、永久に解決のできない問題となるであろう。

吃音治療というものは、もっともっと、はるかに人間存在の深い本質に根ざしたものであることを、これまで吃音で悩んで生きてきた人々が教えてくれている。

そして、そのなかには、これまでの「教育」ということばで呼ばれている一般通念的あり方への大きな反省が含まれており、人間教育への新しい方向性が指向されている。

ここではっきり言うと、〝ことばの教室〟〝言語治療教室〟は、吃音をなおすところでは決してない。もちろん矯正や治療をするところでもない。あえていうなら、吃音と呼ばれている子どもたちと、ともどもに生き教育をするところであろう。

その教育も、決して今までの学校教育の中で行われてきた、いわゆる「教える」というレベルで営まれている一般通念的な既成の教育でなく、これまでの教育の殻を打ち破った新しい次元のものである。

その教育への脱皮がなくして、現在、学校教育のなかでやられている教育のパターンをそのまま言語治療教室の中に持ちこんだのでは、言語治療教室の存在意義はなく、そのままであるなら、吃音を対象にする言語治療教室はもう不必要であるとさえ言えよう。

普通学級と同じパターンで行うとすれば、わざわざ言語治療教室を学校の一隅につくって一週間にわずか二～三時間通級するような無益なことはやめた方がよいことになる。

なぜなら、一週間に二～三時間という時間は、児童生徒の全生活時間帯のなかで睡眠時間を除いて、わずか三パーセントの時間である。このわずかな時間であとの九七パーセントの時間の言語生活に責任のもてる吃音治療ができるなど無謀な考え方であろう。

それが無益だとするならば、その無益のため二～三時間の貴重な時間を費やすことは、現在の知育偏重の教育のなかで一層の無駄であることさえ人びとは気づいていない。「言語治

療教室で吃音児を扱うので、普通学級の担任教師が自ら行うべき、その子どもに対する教育の責任を放棄してしまっている」という人びとのことばを、今一番大切にすべきではなかろうか。

新しい次元での教育

私たちはこれまでに吃音を客観的に科学的に扱おうと努力し、懸命のアプローチが続けられ数多くの理論がうちたてられ、治療法が工夫されてきた。

しかし、そのような科学的理解、客観的理解の上にたったアプローチのしかたは、吃音行動を「そのあるがままに」理解してきたのだろうかというと、そこでいう理解なるものは、「吃音の理解」でなく、吃音についての私たちの理論を吃音と呼ばれる人びとに投射してきたものにすぎなかったのではなかろうか。

むしろ、これまでのやり方で、治療してきた努力は、かえって吃音の再生産に結びついてきた傾向さえみられる。

そのことが事実「吃音」であるかどうかが問題でなく、そのようなことばで呼ばれている現実の事実（人間または場面）に対する私たちの関係の仕方が問題である。

関係の仕方ということになると、これまでの相手をどうしようか、こうしようかという

(How to do is to do) ことより脱皮し、そのことに対して治療者がいかにあればよいか (How to do is to be) への脱皮が提案されてくる。

すなわち、吃音者をどうするか、こうするかという「なおす努力」よりも、その吃音者に対して吃音者をとりまく人びとがいかにあればよいかということが、治す努力の否定への第一歩となっていく。

なおす努力の否定のうえにたった吃音へのアプローチ

したがって、吃音が「よくなる」とか、「なおる」ということは、どもること、すなわち症状が改善され、回復する過程というよりも、広い意味の「自己実現」への過程であり、吃音治療の目的も、どもることを治療したり、問題を解決してあげたりすることではなく「完全に機能する人間」への育成であり、症状の消失や、知覚の変容、行動の変容は、その結果として起こることである。

症状の消失や、知覚の変容は、あくまで副次的なもので、この副次的なものの効果が皆無であっても、それが決して目的ではないわけである。

そのように考えると、吃音治療の目的は、一切の学校教育の目的と同じであり、人間としての生き方にかかわるカウンセリングの問題に帰結してくる。

最後に実践事例より

八月に別府市の五一年度夏季カウンセリング・ワークショップが開催された。七〇人の参加者の中に言友会の三名が参加した。三名の者は「なおす努力」の否定の上にたって、自己の吃音を真正面からぶつけ前面にうち出した。

ワークショップの中で、三名の者は受容され、①自己一致　②無条件の尊重　③共感的理解という人格変容の必要にして十分な条件に一歩でも近い雰囲気の中で、十分に機能する人間像に接近していった。

この四日間、この三名にとっては、**吃音が吃音でなくなってしまった。話し手と聞き手との関係の中で三名のことばのくりかえし、つかえ、ひきのばしの非流暢さは、貴重な価値あることばとして高く評価され、むしろどもることに誇りがもたれていった。**

どもることが受け入れられ、どもることがどもらないことよりも優位に立つと、そこにはどもりをなおそうとする動きは全くみられなくなる。

ここにこそ、どもる人の本当の意味の自由があることがはっきり証明され、ワークショップ終了後、彼らは言友会で、また実際の生活の場で益々生き生きと十分に機能しはじめている。

なおす努力の否定の上にたった新しい次元からの吃音アプローチがカウンセリング・ワークショップの中でみごとに実証されつつある。

これらを学校教育の中にどう展開していくかが、これからの課題である。

さらに一般の全ての人びとに対する言語衛生の普及徹底のため、中学・高校の基礎教材の中に言語に関する知見を盛りこむことはもちろん、教員養成大学の一般教職課程の中で、是非とも全員に正しい認識をもってもらうことも目下の急務のひとつである。

3　三カ月でどもりを治せ

千葉芳秀

入社

昭和五〇年度の春、私は人並みに大学を卒業した。しかし、足を運んで試験を受けた会社は、ほとんど面接で拒否され、役所なら通るかもしれないと思って受けた私は、そこでも自分の実力のなさと、考えの甘さを思い知らされた。そこで仕方なく、かねてから親類の人に頼み込んであった大阪の会社に就職することになったのである。

親類の人は、その会社の幹部たちに僕を紹介する時、「どうかひとつお願いします」と、深々と頭を下げてくれた。このことが、いつまでも私の頭に残った。二二歳にもなって、知人に頼りながらしか職にありつけなかった自分が、情けなかったのである。

とにかく採用が決まり、私が配属されたのは、総務部人事課であった。私と一緒に入社した者は、ほとんど営業であったが、会社が私のハンディを考慮に入れてくれたのだろう。

私の採用にあたって幹部の人達は、一年もすれば本人も努力して、どもりを治すに違いないと考えていたようだ。どもりを治した人の例をあげて、お前にもできないことはない、治せないのは努力しないからだ、といわば三段論法でやってくるのだった。

入社後、社長との面接があった。社長は私に入社動機を尋ねた。私は即座に、「他の会社をたくさん受けたが、すべったから」とありのままに答えた。社長は表情を険しくして「もし君が、この会社で三カ月たって何もできないようなら、おとなしく立ち去りなさい」と言った。

私はこう言われた時、恐ろしいとも悲しいとも思わなかった。普通の人なら、無理に採用してもらったのだから、他の社員以上に頑張らなくてはと考えるだろうが、どうせ本意で入った会社ではないと思っていた私には、そういう気持は起こらなかったのである。

私の仕事は、人事課での月給計算と保険金算定の助手であった。ところが私は、算盤は上

手ではなかったし、細かい数字をながめるのも好きではなかった。むしろ、向いていないとさえ思っていたのである。

私と同期に入社した仲間達は、一カ月もすれば、すべての面で順調であるように見受けられた。私はまず、電話の応対でつまずいた。同期の仲間が、まったく上手に電話応対しているのをみるのは、辛いことであった。

それに各職場には必ず朝礼がある。朝礼当番は、平社員が交代制で受け持っていたが、当番にあたった者は、必ず前に立って何かを話さなければならなかった。私は、この時が苦痛であった。冷静になろうとすればするほど言葉が出ず、どもってしまったのである。

吃音矯正にとりくむ

ある時、私の現状を見かねたある上司が、民間矯正所に行くように勧めてくれた。私は、仕事にもまれていると、次第にどもりは治っていくだろうと考えていたが、利潤を目標とする企業においては、そんな悠長なことも言っておれなかった。

私は、さっそく民間矯正所を探し出した。案内の人から説明を聞き、その矯正所でどもりを治した先輩の話を聞いた時、私はもう大丈夫だと思った。これでなんとかなるだろう。その時、私には民間矯正所が神様のように思われた。私は職場に帰り、上司や同僚に、矯正所

に通うことにしたからもう大丈夫だと報告した。

矯正所の教師たちは熱心であった。ここで私はいろいろな技術を教わった。口のあけ方、母音のつけ方、呼吸の仕方など、この技術をより忠実に実行している者が、いわば優等生であった。だからみんなは、人前に立つ時、できる限り大口をあけ、できる限り息を吸い込み、できる限り母音を引きのばして話そうと努力した。

しかし、日がたつにつれて、私は初めのような忠実さがなくなり、次第に矯正練習に矛盾を感じ始めるようになった。話すことに、あれ程の努力がいるものなのか？　話すということはもっと別のものではないか？　呼吸ひとつとっても、どもりでない人で話す前に意識して息を吸い込む人が、どれだけいるだろうか？。

矯正所が要求しているのは、言葉の上での完全さであって、各人の個性を滅却し、常人でもできないことのような気がした。反面、本当は私の努力が足りないからよくならないのか、という疑問も感じた。

とは言え、他に方法も知らない私は、惰性的に残業を早めに置き、矯正所通いを続けた。

この頃の私は、会社の電話を大いに活用してやろうと思いついた。電話から逃げずに、とにかく電話と接していれば、そのうち慣れてくるに違いないと思ったのである。

現実の厳しさ

ところが、事態は私が予想したほど、うまくは運ばなかった。電話に出る時、私はいつも周囲の眼が気になり、「あいつ、今度はうまく話せるだろうか」と職場の人たちが、耳をすませてこちらを窺っているような気がしたのだ。このような心理状態では、何度電話を取ってもうまく話せるはずがなかった。

これをみかねた私の上司は、こう言った。

「君の努力は認めるとしても、電話の相手のことも考えてあげなさい。それに、君が答えられることでも、相手に内容が通じないため、他の誰かがまた代わって答えなければならなくなる。そうなると、電話ひとつで二重の手間がかかることになる。利潤を目標とする企業では、なるたけロスを少なくしなければならないのに」

その時から私は、電話の応対は必要最少限度にとどめることにしてしまった。

前にも書いたように、私は算盤や簿記が得意ではなかった。にもかかわらず、どもりを治すことばかり考えていて、算盤や簿記の練習をしなかった。私が計算したもののなかにミスが見つかり注意をうけたことも何度かあった。仕事を完全にやり遂げることにより、どもりのハンディの穴埋めをしなければならないのに、これではまさしく泣き面に蜂である。上司

の信用をなくしていったのも、当然のことだったのかもしれない。

とにかく、この頃は仕事への熱意がなかった。いわば悪循環の繰り返しであった。

ある時、私が矯正所に通っているにもかかわらず上達しないのを見て、上司はこう言った。

「君は最近矯正所に通っているのかね」

実のところ、私はその頃矯正所の限界を感じ、週に一度位しか行っていなかった。しかし、上司には、よく行っていると返答するしかなかった。

「君がどもりを治す努力をしているかどうかを、私は、君が矯正所にまじめに通っているかどうかで判断する。それ以外に判断のしようがないからね」

私は、この時ほどいらだたちを覚えたことはなかった。周囲のどもりに対する認識について、ほとんど絶望的なものを感じたのだった。

「君を識にする」

その年も暮れの忘年会の席でのことだった。酒を飲み、歌を歌い、酔いもさめてきて、そろそろ皆が帰り支度をする頃、総務の部長が私を席に呼んだ。

「君はどもりを治す努力をしているのかね。今の君では、まだまだ社会人として半人前だ。ほんとうに矯正所に通っているのかね。まさかうそを言っているわけでもないんだろうな」

私はいろいろと弁解をした。最後に部長は、「では、ほんとうに矯正所に行っているのだな。電話で問い合わせてもかまわないのだな」と念を押した。

私はさんたんたる気持だった。説明することもできなかった。いや、説明すること自体がナンセンスであった。営業マンが売上高によって評価されるように、私もまた、どもりを治すことによってのみ評価されていたのだ。大事なのは結果であって、過程ではなかった。

帰りの電車の中で、酔っている頭の中に響いたものは、部長が最後に付け足した言葉であった。

「君がどもりを治さない限りは、私は君に対して断固たる態度で臨まなければならないだろう。もし君が、三カ月たってもどもりを治せなければ、君を馘にする」

来るなら来やがれ、するなら勝手にしやがれ、私の腹はこの時決まった。

私が会社をやめたのは、それから三カ月たってからであった。